

通訳を探して

山田七絵

二〇〇四年一月、出張で初めて訪れたラオス北部の地方都市ルアンパバーンで、私は一人途方に暮れていた。すでに日は傾き、目抜き通り沿いに並ぶゲストハウスやレストランがオレンジ色に染まっている。

私には明日までにやらなければならぬことがあった。それは役場での調査を手伝ってくれる、ラオス語／英語の通訳を探し出すことだ。観光地のルアンパバーンにはたくさんの旅行代理店がある。そこで頼めば良いと聞いていたが、どの店でも「難しい通訳は引き受けられない」と断られた。

大通りをとぼとぼ歩いていると、一軒の旅行社の前を通りかかった。中を覗くと、奥のカウンターの向こうからがっしりした店主らしき男性が、ぎよろつとした眼でこちらをにらんでいる。年齢は五〇歳前後だろうか、色が黒く、硬そうな頭髪が逆立つように生えており、旅行者というより軍人といった風情である。店に入りカウンターに座ると、電話の応対をしていた店主はガチャリと電話を置いた。最初に断っておくと、本文中の彼の言葉は全て英語だが、受けた印象通り日本語に訳している。

私が「自」紹介をし、用件を伝えると、彼は「どういう研究所だ。調査の目的は何だ」と太い声で質問した。その英語は流暢で文

法的に正しく、私は彼が高等教育を受けた人物だと確信した。質問に答えると、今度は「参考までに質問票を作ってこい」と要求された。私は隣のインターネットカフェで大至急質問票を英訳し、提出した。店主はじっくり目を通していたが、急に顔を上げると恐い表情で、「綴りが間違っているぞ！」とタイプミスを指摘した。

最終的に彼は「俺は忙しいが三〇ドルなら引き受けてやる」と快諾し、忙しいはずがコーヒーを二杯も出してくれ、私の仕事についていろいろ質問した。そして、「滞在中、いつでも店に來い。ビールもタダで出すぞ」と言った。店を出ると、通りで幻想的なナイトマーケットが始まっていた。

翌日、気弱そうな役場の担当者は約束の一時きっかりに待っていた。昨夜の「役所の奴らは一時半にならないと絶対來ない」という発言通り、通訳は大幅に遅刻したが、担当者は心底ほっとした様子だった。調査は無事終了し、役場を出て通訳料を払おうとすると、店主はバイクにひらりとまたがり「夕方また店に來い。もつと話をしようぜ」とニヤツと笑い、姿を消した。

再び店を訪ねると、店主は自慢そうに店の壁に貼ってある一枚の賞状を指さした。それは卒業証書で、今より一層眉と髪の濃

い店主の顔写真が貼られている。ロシア語と英語で一九八〇年代前半（と記憶している）にロシアの大学で教育学修士号を取得したことが記されていた。そんな高学歴の彼がなぜ旅行代理店の経営者なのか疑問に思ったが、ラオスの公務員の給料は低いと嘆いていたので、それが理由なのだろう。

やがて彼がパクセ（最南部の都市）出身であることが判明すると、北部出身のラオス人が教えてくれたあることを思い出した。ラオス中・北部方言は静かで穏やかだが、南部だけは明らかに異なり、基本的に大声で語尾が伸びる。つまり日本語でいえば荒っぽいべらんめえ調なのである。店主の迫力満点な話し方は、まさにそれだった。

二時間はかり話した後、店主はニヤニヤしながら私に「留学中、あんたによく似たガールフレンドがいたよ」と言った。調子を合わせることにして、私は隣で仕事中の奥さんを横目で見ながら小声で「その話は奥さんには内緒ですね」と言った。すると彼は目を輝かせ、「ここで飯を食ってけよ。酒は好きか？」と誘ってくれたが、翌日に響きそうなので丁重に辞退し、「またいつでも來いよ」という声を背に店を出た。

（やまだ ななえ／アジア経済研究所新領域研究センター）